

日本プロレタリア文学集・26



ロレタリア文学集・26



林多喜二集 1

日本プロレタリア文学集・26

小林多喜二集 (一)

定価 二八〇〇円

一九八七年十二月二十五日 初版 ©

発行者 山 本 功

発行所 株式会社 新日本出版社

〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷四の二五の六  
電話 (〇三) 四二二一八四〇二(営業)

(〇三) 四二二一九三三三(編集)  
振替 東京 三一 一三六八一

印刷所 光陽印刷株式会社  
製本所 みさと製本印刷株式会社

落丁・乱丁本がありましたらおとりかえいたします。  
本書の内容の一部または全体を無断で複写複製(コピー)して配布  
することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の  
権利の侵害になります。小社あて事前に承諾をお求めください。

日本プロレタリア文学集・26

小林多喜二集

(一)



## 目次

人を殺す犬	五
瀧子其他	八
防雪林	三
一九二八年三月十五日	四
東俱知安行	一〇
蟹工船	一八
不在地主	二四
工場細胞	三七
オルグ	四二

解 說	西 沢 舜 一
発表年月日と掲載文献	四 九

## 人を殺す犬

右手に十勝岳が安すッばいペンキ画の富士山のように、青空にクッキリ見えた。其処は高地だったので、反対の左手一帯は丁度大きな風呂敷を皺にして広げたように、その起伏がズウと遠くまで見られた。その一つの皺の底を線が縫って、こつちに向ってだんだん上って来ている。釧路の方へ続いている鉄道だった。十勝川も見える。子供が玩具にしたあとの針金のようなだった。が所々だけまぶゆく、ギラギラと光っていた。——「真夏」の「真昼」だった。遠慮のない大陸的なヤケに熱い太陽で、その辺から今にもポツポツと火が出そうに思われた。それで、その高地を崩していた土方は、まるで熱いお湯から飛び出してきたように汗まみれになり、フラフラになっていた。皆の眼はのぼせて、トロンとして、腐った鱧たぐの眼のように赤く、よどんでいた。

棒頭が一人走って行った。

もう一人がその後から走って行った。

百人近くの土方が急にどよめいた。「逃げたなあ！」

「何してる！ 馬鹿野郎、馬の骨！」

棒頭は殺気だった。誰かが向うでなぐられた。ポクン！ 直接に肉が打たれる音がした。

この時親分が馬でやってきた。二、三人の棒頭にピストルを渡すと、すぐ逃亡者を追いかけるように云った。

「馬鹿な事をしたもんだ。」

誰だろう？ すぐつかまる。そしたら又犬が喜ぶ！

眼下したの線路を玩具のような客車が上りになっているこつちへ上ってくるのが見えた。疲れきつたようなバシユバシユという音がきこえる。時々寒い朝の呼気のような白い煙を円くはきながら。

\*

\*

その暮れ方、土工夫等は何時いつものように、棒頭に守られながら現場から帰ってきた。背から受ける夕日に、鶴尖やスコップをかついでいる姿が前の方に長く影をひいた。丁度飯場へつく山を一つ廻りかけた時、後から馬の蹄の音が聞えた。捕かまった、皆そう思い、立ち止まって振り返ってみた。源吉だった。



源吉はズブ濡れの身体をすっかりロープで縛られていた。そしてその繩の端が棒頭の乗っている馬につながれていた。馬が少し早くなると（早くするのだ）逃亡者はでんぐり返って、そのまま石ころだらけの山途を引きずられた。絆纏が破れて、額や頬から血が出ていた。その血が土にまみれて、どす黒くなっている。

皆は何んにも云わないで、又歩き出した。

（体を悪くしていた源吉は死ぬ前にどうしても、青森に残してきた母親に一度会いたいとよくそう云っていた。二十三日だった。源吉が、二日前の雨ですっかり濁って、渦を巻いて流れていた十勝川に、板一枚もって飛びこんだ、という事はあとで皆んなに分った。）

\* \*

飯が済むと、棒頭が皆を空地に呼んだ。

又だ！

「俺ア行きたくねえや……」皆んなそう云った。

空地へ行くと、親分や棒頭達がいた。源吉は縛られたまま、空地の中央に打ちぶせになっていた。親分は犬の背をなでながら、何か大声で話していた。

「集まったか？」大将がきいた。

「全部だなあ？」そう棒頭が皆に云うと、

「全部です。」と、大将に答えた。

「よおし、初めるぞ。さあ皆んな見てろ、どんな事になるか！」

親分は浴衣ゆかたの裾をまくり上げると源吉を蹴った。「立て！」

逃亡者はヨロヨロに立ち上った。

「立てるか、ウン？」そう云って、いきなり横ッ面を拳固でなぐりつけた。逃亡者はまるで芝居の型そっくりにフラフラとした。頭がガックリ前にさがった。そして唾をはいた。血が口から流れてきた。彼は二、三度血の唾をはいた。

「馬鹿、見ろいッ！」

親分の胸がハダけて、胸毛がでた。それから棒頭に

「やるんだぜ！」と合図をした。

一人が逃亡者のロープを解いてやった。すると棒頭がその大人の背程もある土佐犬を源吉の方へむけた。犬はグウグウと腹の方でうなっていたが、四肢が見えているうちに、力がこもってゆくのが分った。

「そらッ！」と云った。

棒頭が土佐犬を離した。

犬は歯をむき出して、前足をのぼすと、尻の方を高くあ

げて……源吉は身体をふるわしていたが、ハッ！として立ちすくんでしまった。瞬間、シーンとなった。誰の息づかいも聞えない。

土佐犬はウオットと叫ぶと飛びあがった。源吉は何やら叫ぶと手を振った。盲目が前に手を出してまざるような恰好をした。犬は一と飛びに源吉に食いついた。源吉と犬はもつれあって、二、三回土の上をのたうった。犬が離れた、口のまわりに血が附いていた。そして犬は親分のまわりを、身体をはねらしながら二、三回まわった。源吉は倒れたまま一寸の間ピクピクッと動いていた。がフラフラと立ち上った。と土佐犬は吠えもせず飛びかかった。源吉はひとたまりもなくはね飛ばされて、空地を区切っている塀に投げつけられた。犬はまたせまった！源吉は犬の方に向き直った。そして塀に背をもたせ、背中ですって立ち上った。皆んな思わず其の方を見た。こっちに向けた顔はすっかり血だらけで分らなかつた。その血が顎から咽喉を伝って、すつかりムキ出しにされて、せわしくあえいでいる胸を流れるのが分った。立ち上ると源吉は腕で顔をぬぐった、犬の方を見定めようとするようだった。犬は勝ち誇ったように一吠え吠えすると、瞬間、源吉は分けの分らないことを口早に云ったか、と思うと、

「怖くない！ オツ母ッ！」と叫んだ。

そしてグルッと身体を廻わすと、猫がするように塀にもがいて上るような恰好をした。犬がその後から喰らいついた。

\* \*

その晩棒頭が一人附添って土方二人が源吉の死骸をかっいで山へ行つた。穴をほつてうずめた。月夜で十勝岳が昼よりもハッキリ見えた。穴の中にスコップで土をなげ入ると、下で箱にあたる音が無気味に聞えた。

歸りに一人が、丁度棒頭の小便をしていた時、仲間に「だが、俺アなあキツト何時かあの犬を殺してやるよ……」と云つた。

## 瀧子其他

### 一

毎日の掃除を終えて、酌婦の初恵と光代が屋根裏になっている室へ上つてきた。光代は褌を外してその辺に投げ出すと、両手で着物の腰を一寸つまみ上げた。桃色の腰巻の端と白い太い脛の腹が出た。そして「汗ですっかり着物がねばる。」と云つた。

初恵は鏡台の向きを直して、首だけを鏡のすぐ前につき出して、パタパタと鼻頭はなごまに白粉の袋をたたきつけた。終ると、鏡にフランス刺繡はなざまのしてある覆いを下して、隅の方へズラしてやった。

「チイタカ、チイタカ、チッチッチ」と、光代が足拍子をとって、室の中を一寸行きもどりして、窓際に坐つた。初

恵も並んで坐ると、光代の肩に手をかけた。屋根のトタン板が熱しているので、屋根裏の室の中はムーンムーンとしていた。蟬が時々ブーンブーンと羽音をさして飛んでいた。

「眠い眠い。」瀧子が膚ぬぎになって入つてきた。大柄な、白い膚の女だった。

「あれ。」

窓から外を見ていた光代が、通りを指さした。初恵もその指の方を見た、「まあ！」

「チョット、瀧ちゃん。」

光代が振りかえつて瀧子を呼んだ。瀧子は腕を袖に通しながら、「何よ？」と云つて、二人の間に割り込むように坐つた。

「ねえ、あれさ。」

二人が見ていたのは、多分三、四日前位に結婚したような夫婦連れだった。

「へん！」

瀧子はつまんなそうに身体を起すと、くるつと向きをかえて、室の中を、ワザと足に力を入れて、笑談をしているように歩き出した。二人は吸いつけられたように見えていた。

「妬いたねえ、さては。」

光代が振り返えらないで、そう云つた。

「何がさ、そんなもの……」

舌打ちをした。が、窓の方へ来ると、瀧子は顔を出してもう一度外を見た。が、すぐ顔をひっこめて、手をプランプランさせながら、身体をその度にくねらして、室の中を歩いた。「あれア、あれさ。」独言のようにそう云った。

二人の姿が向う角に見えなくなつたとき、初恵と光代は同時に、

「うらやましい！」と云った。

瀧子は「あれア、あれさ……あんなもの。」思い出したように時々云った。

下で光代を呼ぶ声が出た。光代が立つと、初恵もついて下りて行つた。二人が居なくなると、瀧子は急いで窓から首を出してみた。さっきの二人連れはもう見えなかった。何かがっかりしたようにうなだれて、眼尻がチカチカしてきた。

「何アに、あれアあれさ……」

ひくく独言をした。

\*

瀧子は今見たその男がこの家に来たことのあるのを、起億の何処から探し出した。臆病気にオズオズしていたことがある。それが最初だった。酔って友達と来たことがあ

る。すっかりもの慣れて、大胆な、淫猥なことを女に平気でしたことがある。がそんな事は別に際立つてはつきり分らなかった。然し、「お前達をみると、俺は何時でも心が暗くなるんだ。これは世の中の何処かが間違っているからだ。」と云つたことが、前と後の連絡なしに、その男と結びついてハッキリ今でも思い出せた。……瀧子は、自分達のところへ来て、それからしばらくして来なくなった沢山の男を思い浮かべてみた。そう云う色々な沢山の男が、然しそれぞれにちアんとした家庭を持って暮しているのだ、と思つた。そして自分達はと云えば！ 瀧子は自分の身体のまわりを見廻わしてみた。

二

階段をギシギシいわせて、光代が上つてきた。

「どうしたの？ ハイ、手紙。」

そう云つて、瀧子の前に手紙を投げ出した。瀧子はさっきのまま身体を動かさずに、眼で投げ出された手紙の送り人を見た。

「馬鹿にしてる。」そして、ものうく「一寸封を切つて読んでみて頂戴い。」と云つた。

「何云うのさ。コレからの手紙を……」

「読んでくれなくなつたつて、本当は中に書いてあることは分つてるの……僕は貴女を愛していますさ。それで是非僕は貴女と一緒にになりたい。貴女のような方をそんな泥の中にふみにじつて置くことは……なんて」

「ハイ、ハイ……有難うございますだ」

「何十回も同じ文句ばかり読ませられたら、大概頭の悪い奴でも暗誦出来るようになるだろうさ。男つて綺麗な女を見ると、スグ、僕は貴女を、とくるんだよ。助平な奴さ」

瀧子はそう云つて、大儀そうに封を切つた。「何んでも手紙が来ないようにするには、手紙を便所で使う紙にしてしまえばいいつてねえ。」

「うん。」

「でも、まあ、よっく皆がみんな、書く文句が一字一句も異わないんだねえ、感心してしまふ。」

「そして口先さばかりでさ……」

「男はねえ、綺麗な女を見ると、すぐ××したいと思うの。それが素人の娘とか、他人の奥さんとかなると、まさか、ねえ。ところが、武、参丸もあれば、××出来る女がいると来ているから持つて来いさ。男はねえ、実際……」

瀧子は立ち上つて、帯をしめ直した。「こんなに股の肉

がなくなつてしまった。」

光代はごろりと寝ころぶと、側に投げ捨ててあつた雑誌をとりあげて、あつちをめぐつたり、こつちをかえしたりした。そして独言のように、

「なんだか今度の検査は……駄目らしい。」と云つた。

「気をつけないと、馬鹿みるよ。」

「身体も悪くなるし、……もう最後ねえ。」そう下から瀧子を見上げて、うつろな笑い方をした。

「私なら助平男の、××を、病気でくさらしてやるよ。そして嬢も子供にもうつさしてやりたい。お蔭様で嬢が始終腰をまげて、\*\*\*がったり、子供が眼くされで、つんぽで身体中腐れて生れてきたら、どんなにすウとするか。」

「まあ、何時のまにそうなつたの。」

「ふん、だ。」

「来た頃は毎日××した後では、この室へ夢中にかけて上つてきては、あすこの夜具布団の上に身体をなげ出して、お母あさん、私、私なんて泣いていたのにさ。それに……」

「何んだつて、昔のことなんか引ッ張り出してくるのさ！」

瀧子は強く云つて、然し何処かオド、オドした眼差を窓の外へそらした。

「それに、初めて検査がある時なんか、行かない行かない

ッて……。」

「いいッて！」

「まあ、いいさねえ。誰でもそうなんだから。××や×××のことなんでも、平気で云えるようになるし……だんだんこれア普通の人間様から遠ざかって行くんだらう。」

「いやだいやだ……なぐるよ！」

隴子は立つたまま、足で光代の腰のあたりを押しした。そして階段を下りて行った。

「隴ちゃん、あとで××を見てくれない。×××たかつて、るらしい。」

光代は後からそう云った。

茶の間へ入ると、初恵は女将むかひの用事で、外から包みをもつて帰ってきた。台所で女将と何か話していたが、茶の間に入ってきた。

「姐あねさん、今ねえ、昔の小学校の友達に街で会ったの。」  
 そう云って、黒腫くろぐもの多い、つぶらな眼で隴子を見上げた。  
 パチパチとしばたいてきたように思つて、隴子はその眼を避けて、炉辺に横なりに坐った。そして新聞をとり上げた。

「そう？」

「前から分つてたんで、反対の側の家の下を通つて見られないようにしたんだけど……こんな風になったのを見られ

るのが恥かしかつたの。だけれど……」

「そんな事……」

「だけれど、あのお友達が、自分達の仲間からこんなものが出たと思つて、かえつて、あの人が恥かしく思わないか、と思つて……ねえ。」

隴子は一寸新聞から眼をそらして、初恵を見た。それから又新聞を見た。が、読んでいなくなつた。一所ばかりを見ていた。光代が何時か「初ちゃんはまるでもとの隴ちゃんを見る気がする。」と彼女に云つたことを思い出した。

「変んな日だよ、本当に……」

隴子はあくび交りに立ち上りながら、独言のように云つた。そして又階段を上つた。初恵も後から上つてきた。

「初ちゃんは幾つだっけ？」

「まあ……十七よ。忘れたの？」

「十七、ねえ。十八になると、初ちゃんでもやつぱり十八のようになるだろうねえ。」

「何を云つてるの。おかしいよ。」

「十七、十八、十九……と。」語調をかえて、「何んだか、今日息苦しくて、お酒でもウンと飲みたい気がするの。」

室の中から、

「又暴れてもらつたりすると、迷惑するから、もう大酒だ

けはご免してくれ。」

光代が云うのが聞えた。

三

「チ、ヨット、チヨット。」

闇をすかして、光代が声をひくく呼んだ。そしてチュウ、チュウと鼠鳴きをした。

「ニ、ャン、ゴニャンゴ。」男が猫の真似をした。「ハハハハハハ。」

「馬鹿にしているよ、チ、エッ！」

光代はクルリと後向きになって、足で後へ砂を蹴る恰好をした。その時懐手（たこぶ）をした男が近寄ってきた。

「どうだい、景気は。」

そう云って、光代と一緒に立っていた初恵の手を握った。

彼女は何も云わないで男の顔を見つめた。

「馬鹿に無愛想だなあ——眼がいいぞ。うるわしの瞳よ、か。」

「オイ、オイ品物じゃないんだよ。」

澁子が側から、男のような声を出して云った。

「凄いなあ！ 品物でなくても、式円で……ねえ。へへん

だ。」

「ソラ、後から巡查が来た！」

澁子がそう云うと、息をつまらして、クッククッと笑った。

「親にも云えないことや、国定教科書にも書いてない事なんか、しない方がいいよ。みつともない。」

「ヘエ！」男は友達に「オイ、退却だ。」と云って、握っていた初恵の手を、「キュッ、キュッ、キュッサンキュッ。」と振って、離れた。

「馬鹿にしてら。」光代は後でしゃがんでいたが、そう云った。

男達は二軒置いた隣りの「即席御料理」の方へひやかに寄った。

この時三人連れの男が来た。そして、この越後屋の中に入った。女達はこれで女将にも工合がいい、そう思っ

て、家へ、男の後から入った。皆入ってしまうと、光代は外の方を一寸うかがってみて、それから男の下駄三足を、菰をかぶった酒樽のわきに隠した。

三人のうち二人は二、三回来たことがあった、が他の一人は十八、九の初めての男だった。

「急ぐんだ。」

一人がそう云って初恵を側に引き寄せて頬へチュッとキ

ッスをした。酒にすっかり酔っていた。

「汚いねえ。」

そこを手で何度もふきながら、真赤になった。

「さあ、行こう。」

男は初恵をつれて立ち上った。「あばよ。」出口でチャップリンのような恰好をして、戸をびしゃりと閉めた。

「俺もだ。N、お前はこの女とだぞ、いいか。」

一人は光代を連れて出た。

「学生さん、すっかり！」光代が男の腋の下から首だけを出して、出しなに云った。

若い男は何も云わなかった。皆が出てゆくと、モジモジし出した。

「君、幾つ？」男は乾いた声で云った。

「十四。」

舌の先へじいと酒をしばらく置いて、飲み下した時云った。

「嘘？」

「幾つに見えて？」

「二十か二十一……」

「じゃそうして置こう。いいでしょう、別に……。」

一寸黙った。

「……どうしてこんな所にいるの。」

男はまんととの襟のあたりをいじりながら、きいた。瀧子はちらつと男を見た。

「ここはねえ、越後屋っていうソバ屋でしょう。分る？」

……貴方の商売は何に？……裁判所の方？……市役所の方？——戸籍係？」

男は独言のように口の中で何か云った。そしてソワソワして立ち上った。瀧子は見向きもしないで、

「どうするの？」ときいた。

「君……こんな商売いやだとも思っていないのか……本当の、いい生活をしたいと云う風な……。」男は顔を真赤にして、早口に云った。

「もう、連れの方は終るよ。ここに式円出してるんだもの、早くしたらどう？」

「そんな事どうでもいいよ。」

「困ったねえ。分り切ってることさ。なんなら貴方の妹さんに訊いてみればいいよ。」

「妹？……」

「お母さんでもいいし、貴方の恋人いとこでもいいし……妹さんが式円で……お前さん、少し頭が悪いねえ。」

瀧子は、こういう男は丁度はぐれた鳥のように、時々迷



い込んでくることを知っていた。が、その友達が又そういう男をそのままにして置かないことも知っていた。

「まあ、お飲み、さあ……」

そして、男の耳元に口をあてて「何んにもならない、他人ごととは心配するもんでない。」と云った。

「俺はねえ、友達のようにそう呑気になれないんだ。——

君等の苦しみがそのまま自分の苦しみのようなんだ。」

「じゃ、どうすると云うの。例えば私を貴方の奥さんにもしてけると云うの。裁縫を習わしてくれたり、夜学校へ通わしてくれたりして。」

男は熱心に女を見た。

「ところが、この小樽だけで何人こんな女がいますと思つているの、そして毎日何人平均こんな女がどんどん製造されていると思うの？ とても駄目駄目。追い付きっこないさ。それに第一、貴方がこんな所の女が好きになれるもんでないよ。」

男は何か云い出しそうにした。

「ウン、ウンー 何か熱に浮かされてるんだよ。そんな事此頃流行つてるんでしよう。私これで、二、三十回も、今貴方が云ったのと同じことを聞かされて来ているんだもの。そしてそれは何時もそれッ切りだったの。だからそういう

人をみると……」

瀧子は眼をキラキラ光らせて、妙に笑いながら云った。

「皆な一寸した若い人はそう云うんだもの……笑談なんか云いっこなし。」

瀧子はそう云つて、男を廊下に連れ出した。「静かに歩くんだよ。」

そして一つの室の前に立ち止まった。障子の隙間を自分でのぞいてから、男を代りに押しやってやった。男はそうされるままに覗いた。二人は一言も云わないで、元の室に帰ってきた。——男の顔には血の気が少しも無かった。咽喉が乾いて、唇のあたりがピクピクとけいれんしていた。瀧子の顔も凄味をもっていた。彼女はだまって、酒を飲んだ。男はじいと別な一方だけを見ていた。二人は何んにも云わなかった。

#### 四

瀧子が室へ上つて行くと、初恵が窓から外を見ていた。

足音で、ちらつとこつちを見た。眼が光っていた。

瀧子は一寸鏡に顔を写して、髪を直した。それから何か云おうとして、初恵の方を見たが、顔をそむけた。光代も